臨時休校要請

教師は、何を考え、どう動いたか

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、2020年2月27日、政府は、全国すべての小・中学校、高校、特別支援学校に春季休業までの臨時休校を要請した。それを受けて、高校でも多くの学校が3月から休校した。突然、長期の休校を余儀なくされた今回の事態に、学校や教師はどのように対応したのか。また、生徒は休校中をどのように過ごしたのか。現場の高校教師への緊急ヒアリングと、オンラインインタビューを実施し、その実情を聞いた。

2/27

政府より、全国の小・中学校、高校、特別支援学校に休校要請が出される

2/28

多くの学校で年度内の最終登校日

突然の休校要請。教師は、生徒にこれからどのように過ごしてほしいと思ったのか

自分は何をすればよいのか、何に頼ればよいのかを、自ら考える時間にしてほしい。それらを考えなかったとしても、そのことがどういった結果を生むのかを、自分事として実感できる機会になる。自分の代わりに考えてくれる人がそばにいては、いつまで経っても自分事として捉えられなくなるからだ。（長崎県）

「これからの社会で求められるのは、主体性」と生徒に常々伝えてきたことが、まさに問われる状況になった。**休校中の過ごし方が、高校生活に大きな影響を及ぼし、学力差の広がりも懸念される。己を律し、志を持って毎日を送ってほしいと思った。**我々教師にも、「主体性」とは何かを考え、これまでの指導を振り返り、今後の指導を考える機会になったのではないか。（秋田県）

授業に加えて部活動も長期にわたって休みとなるのは、普段では考えられないチャンスと捉え、今までの授業で理解できなかった部分の総復習をしてほしいと思った。授業や課題に受け身で取り組むのではなく、**自ら進んで学ぶことがいかに学力を伸ばすのか、主体的に学ぶことの楽しさを知ってほしい**と思った。（秋田県）

最終登校日、教師は、生徒にどんなメッセージを送ったのか

1時間程度のホームルームだったが、**クラスのよかった点を褒めるとともに、地域のことを考える気持ちや夢を抱くことの大切さを語った。**そして、4月から希望進路の実現に向けて動き出すために、休校中をどう過ごせば有意義なものになるか、自分自身でできることを考えて実行しようと伝えた。（宮城県）

学年集会ができず、最終登校日に、学年主任として私が書いたプリントを配布してもらった。何をするかを生徒に考えさせようと、あえて抽象的な言葉を選んだ。「（略）休み明け、3年生に進級すると進路選択が本格化するが、全国のライバルがこの休みをどう過ごしているのかを想像しよう。このチャンスをつかみなさい。**今、みんなに求められているのは、真の『学ぶ力』だ**」（静岡県）

「休校中の過ごし方で、受験の結果は変わるだろう。過去問題など、教材はたくさんある。課題にプラスアルファの勉強をして、来年の今頃は笑っていよう！」と、生徒に話した。「勉強しておかないと大変だ」と不安をあおるのではなく、**「ここで勉強すれば得だぞ！」といった前向きな思いを持たせるように心がけた。**（福岡県）

生徒のために今できることを考え、行動した。

3/2

多くの学校で
休校開始

3月第4週

多くの学校で
春季休業開始

4月第2週

新年度・新学期が
始まるも、
一部の地域は
休校を延長

教師は、生徒のどんな成長を見たのか

eポートフォリオでの学習記録を見ると、日頃できなかった読書など、生徒は思った以上に教科以外の学びに時間を割いていた。**「早く学校に行きたい」と書く生徒も多く、他者と学ぶことの意義に気づいたようだ。**ただ、学習に取り組めている生徒とそうではない生徒の差が広がっていると感じる。主体的に学習できる力の育成の重要性を改めて感じた。（北海道）

本校では「Compass」（＊2）のタイムラインに学習や生活の記録をさせたところ、自分で考えた模擬試験の対策法をアップし、教師にコメントを求めてきた生徒がいた。その前向きな姿勢は、職員室の明るい話題となった。**授業のない状況下で、学びに対して渇きを覚えたのだろう。**普段でも学びに渇きを感じる状況をつくれば、おのずと自律的学習者になると思った。（大分県）

本校では、学年末考査終了後から4月までの課題を既に出していたため、**休校中、多くの生徒は自分のペースで主体的に学習を進められていた。**ただ、家庭学習では、生徒同士の教え合いなど、周りから刺激をあまり受けることができない。対話的な部分はSNSでは十分できず、深い学びは難しいのかもしれない。（福岡県）

休校期間中、教師は、生徒とどのようなやりとりをし、何を感じたのか

メールでのやりとりや、登校日や個別の事情で学校に来た生徒との対話では、「しっかりやっています」と言う生徒が多かった。ただ、**生徒が取り組む内容が想定内で、可能性が感じられず不安だ。**家庭学習が本当に自分の身になっているのかどうかが分からず、生徒の声が自信がなさそうだった点も、気になっている。（茨城県）

出校日のみの登校とし、学級ごとに担任が対応した。生徒に毎日の部活動の自主練習の記録を見せてもらい、休校中の過ごし方を確認し、励ました。**自分のことを伝えるのは、生徒にとって生き生きした時間のようだった。**（福岡県）

生徒の質問には、「Classi」（＊1）でのコメントのやりとりで回答し、理解してもらえた。添削は、eポートフォリオに生徒に解答をアップしてもらい、その生徒と作成したグループで教師が添削した画像を送った。また、学習時間を入力してもらい、学年平均と学年トップの学習時間を学年のグループにアップする「勉強マラソン」を2日間実施した。**自覚を持って学習した生徒は、自ら学習する効果の高さを実感したのではないか。**（秋田県）

毎朝定時に健康観察アンケートをアプリで配信。3日連続で返信がなければ、電話連絡することにした。生活リズムを整える一助にしてもらおうと、連絡事項は12時、課題は16時に配信。**「過去問に挑戦します」「自分の勉強を始めました」といった生徒のコメントに、自覚を持って生活する姿がうかがえて安心した。**（青森県）

週1回、生徒一人ひとりに電話し、生活の状況や課題の進捗、困ったことなどを確認した。**普段は勉強熱心ではない生徒が、電話越しに「頑張っています！」と元気に答えてくれ、うれしかった。**（長崎県）

オンラインでのコミュニケーション例

生徒：進路について考えた。休校中にある程度決めたい。

教師：よい時間の使い方をしていますね。まとまった時間に、じっくりと自分と向き合おう！

生徒：休みが始まって1週間。このままモチベーションを保ちたい。

教師：そうですね、このモチベーションを維持していきたいですね。そのためには、何が必要だと思いますか。

今後、顕在化してくるであろう課題を受け止める覚悟を持ちながら、教師は、

＊1 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社であるClassi株式会社が提供する、学校教育でのICT活用を総合的に支援するサービス。
＊2 生徒個人にフォーカスして、多面的な分析を基にした効果的な面談指導をサポートする指導支援ツール。

教師は、何を考え、どう動いたか

オンラインインタビュー

福岡県・福岡市立福岡西陵高校　校長
（2020年4月より着任）
和田美千代

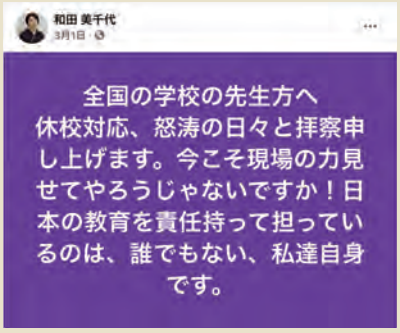
2月27日夜、新型コロナウイルスの感染拡大を防ぐために、政府は全国の小・中学校、高校、特別支援学校に対し、3月2日から臨時休校するよう要請をしました。帰宅中にそのニュースを知った私は、急いで当時の勤務校の福岡県立城南高校に戻り、オンラインを活用した生徒支援の可能性を先生方と検討する準備を始めました。私は、福岡県教育センターに籍を置いていた5年前に、アクティブ・ラーニングの研究に取り組む中でZoom（＊1）のことを知り、それ以降、Zoomを通じて全国の先生方とアクティブ・ラーニングの勉強を続けていました。そのため、今回の臨時休校の要請を知った瞬間、「これまでの学びを生かして、自分にできることがきっとあるはずだ」と思ったのです。

当時の城南高校には、授業動画をYouTubeにアップしている先生がいましたが、クラスのホームルームや部活ミーティングなどは、画面で対面してコミュニケーションが取れるZoomが向いていると思いました。先生方からその使い方を教えてほしいとの声が上がったので、3月5日には、私も講師となって、希望する先生に向けたオンラインツールの活用講習会を開催しました。早速、運動部の顧問が部員とのミーティングにZoomを活用し始め、さらに、担任のクラスの生徒と行うオンラインホームルームへと発展させていきました。

休校中の職員会議で、私が先生方に伝えたのは、「こうした状況だからこそ、常識や前例にとらわれず、いろんなことにチャレンジしてください」ということです。ある若手の先生が、「オンラインで生徒とのコミュニケーションを始めていることを、学校名を出してSNSで紹介してもよいでしょうか」と相談がありました。私は、「全国の先生方の役に立つこと、勇気づけることなのだから、もちろんOKですよ」と答えました。中には、「ICT環境が整っていない家庭の生徒がいるかもしれないから、やめた方がよいのではないか」と、率直に私に思いをぶつけてくださる先生もいました。その気持ちもとてもよく分かります。私は、そういった生徒たちがどうすればオンライン参加が可能になるか、知恵を絞るべきだと考えます。

予測だにしなかったこの状況下で、これまであたり前だと思っていたことの中にも、変えられること、変えるべきことがあったことに気がついた先生は多いと思います。新しく着任した福岡西陵高校は、福岡市教育委員会の支援のおかげでICT環境の整備が進んでおり、オンライン学習サポートが実現できそうな予感がしています。

予測だにしなかった状況だからこそ、常識にとらわれずにチャレンジを



3月1日、SNSでの呼びかけ。「日本全国の先生方と一緒に頑張りたいと思ったのです」と和田先生。（和田校長のFacebook投稿より）

3月5日には、オンライン会議ツールを活用した生徒支援のための校内講習会を和田校長自ら開催。（和田校長のFacebook投稿より）

※和田先生へのインタビューは、Zoomを利用して実施しました（編集部）。

＊1 PC・スマートフォン・タブレットで通話に参加できるビデオ通話アプリ／サービス

オンラインで中高生が学びを深めた「ベネッセSTEAMフェスタ」

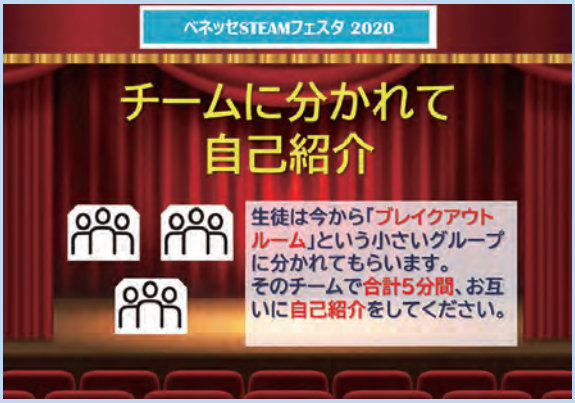
中学生、高校生が、自身の興味・関心に基づいた探究活動の成果を研究や作品にして発表し、各分野の専門家や企業人と対話、交流する「ベネッセ STEAM フェスタ」。当初、3 月 20 日に都内の会場で開催の予定だったが、新型コロナウイルスの感染拡大を受けて、オンラインでの開催となった。

当日は約 80 人の生徒、高校教師、大学教授らが参加。アカデミック、ソーシャルイノベーション、School Maker Faire の 3 部門の発表・講評などが、オンライン上で行われた。生徒の研究成果は、事前に Web 上で参加者に公開され、感想や質問も同サイトに自由に書き込めるようにすることで、発表者と参加者同士の対等な対話を可能にした。当日は、オンラインへのログインに手間取る生徒もいたが、「ベネッセ STEAM フェスタ」スタッフが待機し、チャット機能を利用して参加者一人ひとりに丁寧に応対。スムーズにオンライン参加できるように支援した。

また、参加者をオンライン上で小グループに分け、そのグループ内で自己紹介や振り返りを行うなど、参加者の交流が進みやすくなるように配慮がなされた。

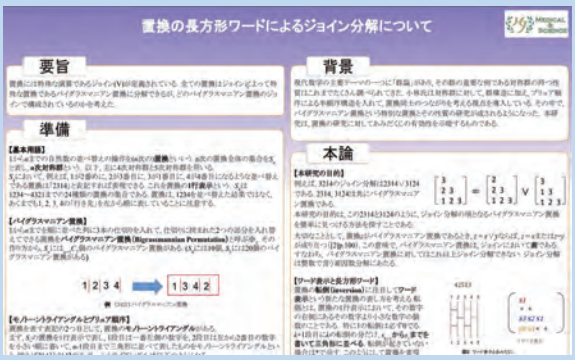
「ベネッセ STEAM フェスタ」の開催責任者は、「生徒だけでなく、社会人や専門家など、参加者全員が学び、新しい価値を生み出す場をデザインするという意味では、オンラインでの開催にはメリットが多くあった」と振り返る。

「インターネットによる学びの場が整備されたことで、中高生でもいち早く一人前の探究者となれるような高速道路ができました。しかし、その先にあるのは大渋滞です。皆さんには、大渋滞を突き抜ける大胆な挑戦をしてほしい。私たちは、大人がすぐには理解できないような挑戦を楽しみにしています。皆で社会を揺さぶるような挑戦をしましょう」（同責任者）

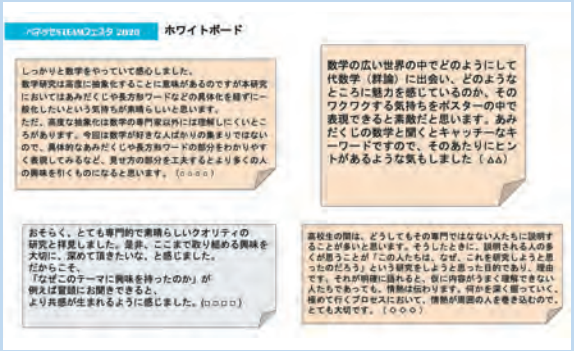


オンラインで開催された「ベネッセ STEAM フェスタ」。参加者全員での話し合いや少人数規模での対話が Web 上で部屋（ルーム）を分けて行われた。

ログインできた後も、マイク機能やカメラ機能上の使用トラブルに見舞われた中学生、高校生に対して、複数のスタッフが対応。全員がオンラインでの交流を楽しむことができた。



高校生グループの作品例。中学生の時に「あみだくじ」に興味を持った経験を基に、研究をスタートさせたという。



参加者は、事前に作品に対する感想や質問を Web 上に書き込むことができた。活発なやりとりがフェスタ当日への期待を高めた。

ベネッセ STEAMフェスタの当日の詳細は、右の開催レポートでご覧いただけます ▶ https://steamfesta.benesse.co.jp/report.html